

第44回 中区明るい選挙推進作文コンクール

入

賞

作

品

集



中区明るい選挙推進協議会



第44回 中区明るい選挙推進作文コンクール



「中区明るい選挙推進作文コンクール」は、大切な選挙や、選挙につながる「まちづくり」をテーマとした作文を夏休みの課題として区内在住在学の小・中学生から募集し、政治や社会の仕組みに関心を持ってもらうとともに、選挙に関する意識を社会的にも高めることを目的として、毎年開催しています。

今年度は、小学生A部門(1～3年生)に316作品、小学生B部門(4～6年生)に457作品、中学生部門に168作品、合計941作品もの応募が寄せられました。応募作品は、区内小・中学校教諭、中区明るい選挙推進協議会会長、中区選挙管理委員会委員長、中区长により審査され、各部門において金賞1名、銀賞2名、銅賞3名、合計18の優秀作品が選ばれました。

■小学生A部門(1～3年生)

テーマ 「わたしのまちのすきなところ」

■小学生B部門(4～6年生)

テーマ 「より良いまちをつくるために私たちにできること」

■中学生部門

テーマ 「選挙について考える」



入賞作品は中区役所ホームページにも掲載しています

<https://www.city.yokohama.lg.jp/naka/kusei/shikai-senkyo/keihatsu/>

— 小学生A部門（一～三年生） —

・金賞（中区長賞）	歴史を身近に感じる街	北方小学校	三年	北口	大翔	：	1
・銀賞	中区で感じるやさしい心	北方小学校	三年	神足	拓海	：	2
	ポルト大すきだよ	大鳥小学校	二年	元屋地	衣都	：	3
・銅賞	黄色い、はたふりおじさん	大鳥小学校	二年	柴崎	海陽	：	4
	私の大好きな、あたり前ではない町	本町小学校	三年	高松	希羽	：	5
	ありがとうがひろがるあさ	間門小学校	一年	植木	康介	：	6

— 小学生B部門（四～六年生） —

・金賞（中区選挙管理委員会委員長賞）	言葉と行動で広げるやさしさの輪	立野小学校	五年	野村	桜來子	：	7
・銀賞	スマホに負けない未来へ	立野小学校	六年	田村	星南	：	8
	ゴミの少ないくらしのために	大鳥小学校	四年	糟谷	紗保	：	9
・銅賞	助けてもらい思うこと	立野小学校	五年	鈴木	啓太	：	10
	自分から行動する	立野小学校	六年	河野	杏奈	：	11
	小さな勇気が与える大きな自信	間門小学校	六年	上関	麗太	：	12

— 中学生部門 —

・金賞（中区明るい選挙推進協議会会長賞）	1票の重要性	大鳥中学校	二年	谷内	心優	：	13
・銀賞	十八歳に向けて	港中学校	三年	成田	彩夏	：	14
	考えて票を投じる	仲尾台中学校	一年	浜田	湊	：	15
・銅賞	選挙権をもたない私たちにできること	港中学校	三年	浅野	陽音	：	16
	これからの未来のために	港中学校	三年	三角	真優	：	17
	選挙権を得て投票するまでに大切なこと	仲尾台中学校	三年	速水	玲愛	：	18

小学生A部門

☆☆☆ 金賞（中区長賞） ☆☆☆

「歴史を身近に感じる街」

北方小学校 三年 北口 大翔

ある日、家族でテレビを観ていたら、「ペリー横浜上陸図」の絵が出てきました。僕はなんとなく見ていただけだったけど、お父さんが、

「その絵の海って、そこだよ。」

と、窓の外を指して言いました。そのとき

「えっ?。」

と思ったのと同時に、なぜかワクワクする気持ちになりました。

近くで見たいので、お父さんに頼んで山下公園に連れていってもらいました。山下公園から海を眺めていたら、何だかそこに、あのテレビで見た「ペリーの黒い船」が、何そうも停まっている絵が浮かんできました。

その後、お父さんと近くにある「横浜開港資料館」に行ったのですが、中庭にある大きな木の前で、

「あの「ペリー横浜上陸図」に描いてあった木の子孫なんだよ。」

と教わり、感動とは少しちがう不思議な気持ちになりました。

べつの日に、インターネットで「昔の横浜」を検索してみても、実際その場所に行ってみることにしました。そうしたら赤レンガ倉庫にはSLが走っていたレールの跡があったり、古い地図通りに川が流れていたり、浮世絵に登場するお店が今でも営業していたり、調べてみると周りには歴史がたくさんありました。

僕が通っている横浜市立北方小学校も、かつては日本初のビール工場だったらしく、学校の中に古い井戸があるそうです。

普段は教科書を見ているでも、覚えなければならぬ事ばかりで、楽しいと思えませんでしたが、でも、すぐ側に歴史があって、それぞれの出来事が今の僕の生活につながっていると思うと、教科書を見るのが楽しくなってきました。

そんな歴史を身近に感じさせてくれる横浜を、僕は誇りに思います。

〈講評〉

「ペリー横浜上陸図」の絵をテレビで観たことをきっかけに、様々な場所を訪れて昔の様子に想いを巡らしながら、歴史をどんどん好きになっていく気持ちがよく伝わってくる素敵な作品でした。特に「なぜかワクワクする気持ち」や「感動とは少しちがう不思議な気持ち」という文章表現は見事で、誰もが経験したことのある感情だと思えます。

作品に描かれた歴史の延長線上に今があります。作者のように横浜の歴史に誇りを持つ子供たちがさらに増えて、これからも素晴らしい歴史が刻まれていくことを切に願っております。

☆☆☆ 銀賞 ☆☆☆

「中区で感じるやさし〜心」

北方小学校 三年 神足 拓海

ぼくは年長のとき、中区に引っこしてきました。引っこしするのはとてもさびしくて、仲良しだった友達とはなれるのが悲しかったです。新しい保育園のさいしょの登園日、ぼくはとても不安でした。でも、転園先の山手保育園の友達はみんなとても親切でした。はじめはどうしていいかわからなかったけれど、みんながすぐに遊びの仲間に入れてくれました。

この夏休み、市役所で開かれた夏祭りに行った時、山手保育園の友達と再会しました。小学生になってからはずっと会っていなかったのに、友達はぼくの名前をおぼえていてくれて、本当にうれしかったです。引っこしをしてきたとき、家の近くを歩いていると、いろいろな外国の言葉が聞こえてきてびっくりしました。いろんな国の人たちが歩いていて、最初はちよっとおどろきました。それでも、みんなが楽しそうに歩いているのを見て、だんだん安心してきたのをおぼえています。

近所のおかし屋さんには、ぼくが一人で買い物に行くと、ぼくがおかしを決めるまでゆっくり待ってくれます。犬のさん歩をしていると、道行く人が声をかけてくれることもあります。近所のおばさんは、中国から届いた美味しいフルーツや食べものを届けてくれます。町のおとなの人がみんなで見守っていてくれる安心感があります。

ぼくはとてもはざかしがり屋で、人と話すのにとてもきんちようしてしまいます。でもこの町の人たちはそんなぼくでも受け入れてくれます。いろんな人達と一緒にくらしながら、お互いの文化を大事にして、困った時には助け合ってくらしているかんきようがとても好きです。ぼくも自分らしくていいんだと感じます。そんなこの町のふんいきがとても心地よくて、ぼくはとても幸せです。

中区はもう、ぼくの地元です。もしかしたら、ぼくは他の町のことも知りたくなって、他の町に住んでみるかもしれない。でもやっぱりもどってきて、大人になったら、この町を守っていききたいと思います。

〈講評〉

中区に引っ越してきたときの不安が、安心に変わっていった様子が、よく伝わってきました。

それは、作者が、中区という町にはいろいろな人が暮らしていて、お互いの文化を尊重し、困ったときには助け合っているということに気付いたからだと思います。

これから違う町に住むことになっても、その町のよさにも気付くことができ、町も人も大切にできる人になるだろうと感じさせる文章でした。

☆☆☆ 銀賞 ☆☆☆

「ボルト大すぎだよ」

大鳥小学校 二年 元屋地 衣都

わたしの家の近くに、大きな白い犬がすんでいます。名前はボルトといいます。わたしが生まれるずっと前からそこにすんでいて、ここにすんでいる人たちはみんなしつていて、まちのみんなにあいされる犬です。いつも元気な声でやさしくほえていました。わたしもちいさいときから、ボルトの家の前をおるときは、かならずのぞいてあいさつをしていました。

でも、ある日からボルトの声がきこえなくなり、みんなで心ばいしていたら、ボルトの家の前におしらせがでていました。

「ボルトは14さい（人げんでいうと百さい）のたんじょう日をむかえました。びょうきで元気がなくねたきりになったけどがんばっていますのでおうえんしてください。」みると、わたしと同じ日がたんじょうびでした。きゆうにとでもしんぱいになり、まい日のぞいていました。なつやすみのおわりに、さんぽをしていたら、ボルトの声がきこえて、かいぬしさんがいたので、はじめてあいさつをしました。

「ボルトは、元気ですか」
ときくと、会っていったと家に入らせてくれました。

ボルトはひろいへやの中でねたきりでしたが、元気な声でわたしたちにこたえてくれました。じつはすこし犬がこわいわたしですが、かいぬしさんが

「ぜったいにかまないからだいじょうぶだよ。ボルトがよろこぶから、なでてごらん」

といつてくれたので、さわってみました。あたたかくて、やわらかくて、体中をつかって大きくいきをしていてボルトは元気に生きようとがんばっているんだなと思いました。

わたしは、もつともつとボルトがすきになりました。はじめてあったかいぬしさんは、とてもやさしくておもしろいおじさんでした。ボルトやまちのことをたくさんおしえてくれました。

わたしの家の近くには、同じ学校にかようともだち、まい日あいさつしてくれるおばあちゃん、ときどきしか会えないちがう学校のともだちもたくさんいます。でも近くにすんでいてもしらなかつた、やさしくて、おもしろい人に会えてこの町がもつとすきになりました。

ボルトが会わせてくれたのかな。これからも、ボルトが元気で長生きしてくれるといいなと思います。そして、ボルトがいろんな人に会わせてくれるとうれしいです。

〈講評〉

まちのみんなに愛される犬、ボルト。そのボルトの姿が見えなくなって心配していたところ、飼い主からのお知らせでボルトが病気だということを知った作者は、勇気を出して飼い主に声をかけたことでしょう。

『知らない人に声をかけてはいけません』と言われる現代ですが、まちの雰囲気やボルトが、2人を結びつけたのだと微笑ましく思う文章になっていました。素敵な出会いによって、ますますこの町が好きになったことと思います。ボルトが長生きしていることを願います。

☆☆☆ 銅賞 ☆☆☆

「黄色い、はたふりおじさん」

大鳥小学校 二年 柴崎 海陽

ぼくのつう学ろには毎朝、黄色いはたをふつてくれるおじさんがいます。ぼくが学校に行くとき「おはよう、いつてらつしやい」と言つて、グータッチをしてくれます。ねむたい気もちから、明るい気もちになります。

でも、なんではたをふつているかわからなかったから、ママに聞いてみたら、「学校に行く途中、子どもたちがここにあわないようにはたをふつてくれるんだよ」とおしえてくれました。しかも、ボランテアでお金ももらわないではたをふつてくれている。それを聞いてぼくは、ありがとうというきもちになりました。そのことをママに話すと、「そのありがとうをはたふりおじさんに言つてみなよ」言つたので、ぼくは、「明日言えたら言つてみる」とこたえました。

つぎの日も、つぎのつぎの日も言えなかつたけど、7月12日金曜日、ぼくは、やつとおじさんに「いつもはたをふつてくれてありがとう」って言えました。そしたらおじさんが、「そんなこと言つてくれるのは、きみだけだよ」とかえしてくれました。やつと言えてほつとしたし、うれしいきもちになりました。家にかえつてからママにその話しをすると「すごいね、えらいね」ってほめてくれました。ぼくもうれしいきもちでママもえがおになって、きつと、はたふりのおじさんもよろこんでくれたと思います。

ぼくのすんでいる町には、おともだちがあつまる公園も、おいしいごはんやさんも、いつもやさしく話しかけてくれる店いんさんがいるコンビニも、ならいことができるばしょもあります。そしてみんなが学校にあんぜんにいけるように、黄色いはたをふつてくれるおじさんがいます。

やさしい人がいっぱいいるとおもう。だから、ぼくはこの町が好きです。

〈講評〉

毎朝通学路に立つてくれている黄色いはたふりおじさんが、子どもたちの安全のためにボランテアで活動してくれていることを知り、勇気を出しておじさんにお礼を言うことができましたね。そのことから、みんなが嬉しい気持ちになったことがよく伝わってきます。

それがきっかけになり、自分が住んでいる町のよいところをたくさん見つけ、ますます町が好きになったことでしょう。これからも大すきな町もそこに住む人たちも大切にしたいです。

☆☆☆ 銅賞 ☆☆☆

「私の大好きな、あたり前ではない町」

本町小学校 三年 高松 希羽

私は、公園や図書館や動物園が身近にあることはあたり前ではないということに気づいた。それは、田舎のおじちゃんの家に行った時だ。おじちゃんの家はぶどう畑に囲まれてとてもすてきな所だが、近くに公園や図書館や動物園がない。おじいちゃんの家から、図書館に行くには自動車に乗って二十分かかり、「動物園は近くにはないよ。」と聞いてとてもおどろいた。

私はふだんから、二才の弟とお母さんと歩いて公園や動物園へ行っている。弟は、動物園が好きで、毎日のように行きたいと言っている。そんな弟を見ていると、私も小さいころから、動物園によく行っていたことを思い出す。また、私の町には様々な公園があるので、三年生になった今でも遊び方を少しずつかえ、新たな発見をしながら楽しく遊ぶことができる。こんな身近に動物園があつて様々な公園がある、町に住んでいる私はすごく、幸せだ。

そんな私の町には大きな図書館も二つある。図書館が身近にあることで小さいころから、本にふれあうことが多く、そのおかげで本が大好きになった。小さいころは、よく図書館へ本を借りに行っていた。その時お母さんが言っていたが、私は図書館へ行くと一人で黙々と絵本を読んでいたそうだ。今でも図書館でたくさん本を借りて色々な本に出会えている。

私にとって図書館は宝探しをしているような、わくわくするとくべつな場所だ。

私の町は本当にすばらしい場所で、ほこりに思う町だ。これからも、この町を大切にしたいと強く思った。私はこの町で生まれ育ったことに感謝し、一人一人が幸せにくらせるような町づくりにもせつきよくてきにさんかしていきたいと思う。

〈講評〉

自分が住んでいる町について深く考える機会は、なかなかないものかもしれませんが、田舎のおじいちゃんの家に行ったことで、近くに図書館や動物園、公園が複数ある自分が住んでいる町は素晴らしいということに気付き、誇りに思えたのは、作者の心が素直で素敵だからだろうと文章から感じました。

そんな作者は、おじいちゃんが住む田舎の素晴らしいにも気付いた上で、一人ひとりが幸せに暮らせる町づくりに参加していくことと思います。

☆☆☆ 銅賞 ☆☆☆

「ありがとうがひろがるあむ」

間門小学校 一年 植木 康介

ある日、ぼくはあさの5じに目がさめました。あさやけ空が見てみたいなあとおもっておかあさんといっしょにペランダに出て、ほういじしやくでひがしをしらべました。本もくふとうのほうの空は、ピンクいろやオレンジいろ、うすいむらさきいろ、いろんないろがまざって、とてもきれいな空でした。

バスの音がきこえて、下のほうを見たら、あれ？バスていのちかくで、おじさんがヘッドライトをつけてなにかしている。よく見たらおじさんは、どうろにおちているゴミをひろっていました。おかあさんが「あのかたはじぶんのゴミじゃないのに、みんながきもちよくすごせるようにゴミをひろって下さってすばらしいかたね。きつとよいことがあるわね。」といいました。ぼくも、どうろにおちているゴミをひろってみたいとおもいました。

それからすぐに、おとうさんをおこして、かいちゆうでんとんとングと、ゴミぶくろをもつてでかけました。タバコのすいがらが107本、カン1本、ペットボトル2本、かみゴミ60こ、プラスチックゴミ10こを、ひろいました。たくんさんゴミがおちていて、ビックリしました。そして、ゴミをどうろにするなんていけない、とおもいました。

ゴミをひろっているとき、おじいさんや、女の人の、ほかにもたくさんの人が、「ごくろうさまです。」「あさはやくからありがとうごさいます。」といってくれて、なんだかこころがうれしいきもちになりました。

ゴミをひろうと、まちがきれいになってうれしい。いろんな人から「ありがとう」と、おもってもらえてうれしい。こういうきもちをおしえてくれたヘッドライトのおじさん、それから「ありがとう」といつてくれたまちの人たちに、ぼくも「ありがとう」といいたくなりました。

ありがとうのきもちがいっぱいの本もくのあさが、ぼくはだいすきになりました。これからもゴミをひろいにいきたいとおもいます。

〈講評〉

ある朝、お父さんとごみ拾いをしたことで、作者にはいろいろなよいことがありました。ごみの多さに驚いたと思いますが、ごみを拾うと町がきれいになっていくこと、たくんさんの人から「ありがとう。」と言ってもらえることなど、素敵なことに気付いたことが、よく分かりました。

そのことに気付くことができたのは、きれいな朝焼けが見えた日にごみを拾っていたおじさんのおかげですね。これからもありがとうの気持ちがいっぱいの本牧の朝の町を、おじさんと一緒にごみ拾いをしてください。

小学生B部門

☆☆☆ 金賞（中区選挙管理委員会委員長賞）

☆☆☆

「言葉と行動で広げるやさしさの輪」

立野小学校 五年 野村 桜來子

「市営バスの運転手が困っている人を助けている様子はとても素敵でした」授業で調べ学習をしているとき、横浜市のサイトで市民の声というページで見つけた言葉だ。そこには町のし設や方針についてのクレームや要望があふれていた。けれど、この感謝の言葉を見つけた時、私はそのバスに実際に乗ってみたいと思うほど温かな気持ちになった。クレームや注意書きは簡単に書いてしまい、社会にあふれている。しかしポジティブな言葉は人の心を動かすのだと感じた出来事だった。私も先生や親から注意されるよりほめられる方が、もっと良くしようと思いい、うれしくなるのと同じだ。例えば「汚さないでください」という貼り紙よりも、「きれいにしてくれてありがとう」と町に貼ってあった方がきれいにしようと思える気がする。人の心を動かす言葉だけでなく、人の心を動かす行動も増えると町や社会が少し変わっていくのではないだろうか。

私の住んでいるマンションで、雨が降り出すと、ほかの人の重たい自転車をぬれない場所へ移動させてくれ、ぬれた自転車をタオルでふいてくださる方がいる。誰かがさりげなくやってくれたことに気づいた時のうれしさは、なにかを買ってもらった時のうれしさとは少し違う。気持ちが温まるようなじんわりとしたうれしさだ。

「恩送り」という言葉を母から教わった。親切にしてもらった人に恩返しをすることも素敵だが、恩送りとは、別の人に親切にしてあげることだ。三人の人に親切にすると、その三人はまた別の三人に親切にする。今度は九人に増えた親切にされた人がまたそれぞれ三人に親切にする。親切な気持ちをどんどん広めていくことだ。もし社会全体がそんな気持ちを持ってたらどんなに良くなるだろう。

その言葉を知ってから、私も雨に気づいたら同じことをしたり、ゴミを拾ったり、自分からあいさつをするようになった。マンションだけでなく、住んでいる町にもどうしたら恩送りできるかを考えるようになった。そうすると、近所の人がよく声をかけてくれることに気がつき、人々との距離が近くなった気がした。

誰かにやさしさをもらったら、その優しさを周りの人にもふりまいて、心を温かくしたい。こうげきの言葉を使うより、良い言葉で人の心を動かす方がお互い気持ちが良い。言葉や行動で人がつながっていったら素敵だと思う。私の住む中区は高齢者や外国人の比率が高い。坂道や階段が多く、高齢者にとっては移動が大変な町だろう。外国の方がとまどう標記もまだまだある。声をかけ、手を差し伸べていくのは私たちがすぐにでもできることだ。

良いことは良いともっと大きな声で認め合い、感謝を伝え、恩送りをする。そんなやさしさの輪が社会でどんどん広がるときっともっと良い町になるだろう。

〈講評〉

実に優しく、前向きな文章である。「より良いまちをつくるために」というテーマを身近で捉え、また等身大で行動することの重要性を説くことにより、作者本人と社会とのつながりがリアリティーを持って読み手に伝わる。作中では人形浄瑠璃でも語られた恩送りという言葉を使い、恩を受けた人ではなく先に別の人に送ること、社会に正の連鎖を増やし良い街にしていこうと綴る。この文に込められた思いが全体に広がれば、本当に社会は良いものになるのにと、改めて考えさせられる。

☆☆ 銀賞 ☆☆☆

「スマホに負けない未来へ」

立野小学校 六年 田村 星南

前に塾に行く時スマホを忘れた日があった。いつも塾に向かう電車内ではスマホを見てることが多いのだが、その日は仕方なく窓の外を見ていた。すると、石川町のあたりで空に綺麗な虹がかかっているのが見えた。雨上がりの雲の切れ間に光が差し、そこに大きな虹がとてもしっかりと綺麗にかかっている、自然の神秘に一瞬で感動してしまった。自分が暮らす町が特別なものになったように感じた瞬間だった。自分と同じ虹を見ている人がいないかと電車内を見回したが、ほぼ全員の人がスマホに目を向けて虹には気づいていなかった。こんなに目の前にすばらしい景色が広がっているのに、それに気づかず今日をこの人たちは過ごしてしまうんだなと思うととてももったいないなと感じた。逆に自分がスマホを忘れた事がとてもラッキーだったとも思った。私はいつも金管バンドの朝練に行く時、学校の横にあるそば屋のおじさんと挨拶を交わす。おじさんは毎朝お店の駐車場でゴムバンドを使ってストレッチをするのが習慣で、私が歩いてくるのを見るととても元気に「行ってらっしゃい！金管頑張れよ！」と挨拶してくれる。私はおじさんと挨拶するたびに「おじさんも頑張っておそばを作ってるんだから私も金管バンドの練習も学校の授業も頑張らなきゃ！」と一日のやる気を出すことができる。でも、私たちが挨拶を交わす横で通りすぎる人たちはイヤホンをし、スマホを眺め、そんな風に元気をくれる人がこの町にいることも気づいていないように思う。そしてその人たちはどこか急ぎながらも朝から疲れているように見える。スマホから目を離し、そば屋のおじさんと挨拶をすれば元気がもらえるのにと感じる。町には自然も人もとても素晴らしく感動するようなもので溢れている。それに気づくだけで、一日とても幸せな気持ちになる。ただ、私含めて多くの人はスマホという便利なものに一日を頼りすぎて、そんな宝物のような瞬間を見逃していることが多いんだと感じる。だからまずは、私自身が町や人の良さを体感するために「スマホを使わない一日」を作って町を観察したり、地域の行事に参加して人との関わりを持ってみようと思う。そして町や人の良さを体感することができたら、町の人に挨拶をし続けて挨拶の気持ち良さを知ってもらおう。それが町の人への習慣となっていったらスマホを見る手を止めて挨拶を笑顔で返してくれるかもしれない。スマホをバッグの中にした状態でいつも通り道を違った視点で楽しく歩くことができるかもしれない。そんなみんなスマホの存在を忘れるくらい毎日ワクワクできるような明るい素敵な町にしたから、私は今から自信を持って行動していく。

〈講評〉

私たちの日常にはスマートフォンがあることが当たり前になってきている。しかし、ふと顔をあげて周りを見てみると自然の美しさや街の人の温かさに触れることができたのがよく分かります。スマートフォンがある暮らしが当たり前で確かに便利だが、頼りすぎてしまうと身近にある幸せに気づけない。これからも明るい街をつくっていくために大切な心掛けです。

☆☆ 銀賞 ☆☆

「ゴミの少ないくらしのため」

大鳥小学校 四年 糟谷 紗保



私は7月に、小学校の社会科見学で鶴見ゴミ焼却工場へ行きました。ここでは、毎日たくさんのごみが集められ、焼却されています。ゴミを処理するためには、多くの費用と場所が必要になることを知りました。ゴミをもやすと、二酸化炭素が出て、地球温暖化の原因にもなります。たくさんのごみが捨てられていることを知って私は、とてもおどろきました。また、横浜市民の一人一人がゴミをへらす心がけをすることが必要だと思います。

私はふだん、ゴミをへらすために、三つの取り組みをしています。

一つ目は、自分が着た服を友達にあげたり、リサイクルショップに出したりすることです。そうすれば、その服は何度も使うことができ、ゴミをへらせません。また、自分の着る服も、人からもらったりフリマサイトなどで、買うことが多いです。少し古かったり、多少デザインが気に入らないこともあるけれど、だれかが大切に着ていた服を自分ももう一度、着ることができるとは、とてもうれしいです。

二つ目は、文房具を大切に使うことです。私は、えんぴつにえん長ホルダーをつけて短くなるまで使ったり、ノートを長く使うための工夫をしています。

特に、連絡帳は一冊をだれよりも長く使っている、自信があります。ふつうは半年くらいで使い終わりますが、私の場合、三年以上ももつのです。なぜかというと、翌日の予定を、たった一行で書いているからです。一行に、「時間わり」、「宿題」、「持ち物」、を書くので、とても小さな字で書くことになりました。そのため、読みやすいように、ていねいにバランスよく書くことを心がけています。

三つ目は、食べ物のむだをへらすことです。私の家では、ニンジン、大根、ゴボウや梨も皮ごと食べたり、ピーマンはタネも料理に使います。皮ごと食べる野菜やくだものは栄養も多いし、ピーマンのタネはプチプチしてとてもおいしいです。また私は、出てきた食事は残さず食べるようにしています。まだ食べられるのに捨ててしまうのは、すごくもったいないことです。野菜やくだものを作ってくれた農家の人にかんしゃの気持ちもあるし、肉や魚は、その生き物の命をもらって私が生きていることをわすれたくないからです。好ききらいしないで食べることは、私の体がじょうぶに成長するために必要だと思っています。

私の好きなこの横浜が、これからの未来もすてきなまちであり続けるために、毎日の生活の中でゴミをへらしていくには、他にどんなことができるか探していきます。そしてその取り組みを家族や友達に伝えたり、周りの人が行っているゴミをへらすアイデアも取り入れて、横浜をより良いまちにしていきたいです。

〈講評〉

社会科見学で学んだごみを減らすための自身の自身が行っている取り組みについて具体的に書かれています。日々生活していく中で、ごみを減らすためにできることを考えることができています。物を大切にしたり、食べ物の捨ててしまいがちな皮や種を食べて無駄をなくしたり誰でも取り組めます。小さなことからでも一人ひとりが心掛けるだけで町のごみは少しずつ減らすことができるでしょう。

☆☆☆ 銅賞 ☆☆☆

「助けてもらいたいと思う」と

立野小学校 五年 鈴木 啓太

ぼくは、低学年のころ、近所の公園で遊んでいて、中学生に助けてもらったことがあります。ぼくは公園で遊ぶことに夢中になっていて自転車のカギをなくしてしまったのです。帰らなければいけない時間になって、そのことに気づきました。しかたがないので、自転車の後ろを持ち上げて、歩いて帰ることにしました。自転車は重くて、一歩一歩歩いてもなかなか進みません。

と中で、おばさんが自転車を押すのを手伝ってくれました。それでもなかなか進まないのです、おばさんが自分の車で運ぶことを提案してくれました。

でもぼくは、家や学校の約束で知らない人の車に乗ってはいけなと言われていたので、断りました。

そして、また一人で自転車を押して歩いていたら、何人かの中学生がやってきました。そして、

「大丈夫」

と、声をかけてくれ、持ち上げて家まで運んでくれました。

家までは、まだ遠かったのですが、とてもうれしかったのを覚えています。

なので、ぼくもだれかのために、声をかけて助けられる人になりたいです。そしてぼくはその中学生の人にあこがれて、困ってる人を助けられるようになりたいと思いました。

なので、だれかに助けてもらいたいぼくもこのような人になりたいと思う人が増え、その思いを実行できれば、このまちはより良くなると思います。

ですので、ぼくは中学生の人たちに助けられたときの、ぼくもこんなふうになりたいというあこがれを実現するため、よくぼくは困っている人がいないかを気にしています。

そのようなことが功をそうして、ぼくが三年生だったとき、どこが自分の学年の場所か分からない新一年生がいて、その子に自分が中学生の人たちに言ってもらったみたいに、

「どうかしたの、大丈夫」

と、声をかけその子の学年まで連れて行ってあげました。そして、その子を学年まで連れていき、自分の学年にもどろうとしたとき、その子が、

「ありがとう」

と、言ってくれ、ぼくはとてもうれしかったです。

このように、助けるよろこび、助けてもらうよろこび、この二つを経験することが、より良いまちをつくるために私たちにできることだと思います。

〈講評〉

筆者が困っているところに街の人が声をかけ、助けてくれる素敵な街の様子が伝わります。自分から「助けてください。」と言うよりも、誰かが声をかけてくれると嬉しいですね。困っている人に自分から手を差し伸べることで誰かの手本になり、その行動をまねる人が増えていくと助け合う町が実現していきますね。自分から街の人に声をかけて明るい街を目指していきましょ。

☆☆☆銅賞☆☆☆

「自分から行動する」

立野小学校 六年 河野 杏奈

私の住んでいる街にはたくさん坂があり、多くの家が高台に建てられています。そのため、家から最寄りの駅に行くには必ず坂道と約百段の階段を使わなければなりません。私は6年間この街に住んでいて、学校の行き帰りも毎日坂と階段を登り下りしています。特に帰りの十分間の登り道がとても辛いと感じます。さらに、暑い日はもっと辛いです。坂の上には保育園があり、大きな荷物を持った保護者の方が大変そうに坂と階段を登っているのや、坂の途中で休憩している小さい子や高齢の方をよく見かけます。私の母も、スーパールの帰りに重い食料品を持って坂と階段を登るのがとても大変だと言っていました。

でも、高台にはいいところもあります。例えば、高いのでいい景色が見れたり、気持ちいい風が吹いてきたり、日がよくあたるので電気をつけなくても部屋が明るかったり、洗濯物がよく乾いたりします。

いいところがあったとしても、登りが大変なことは変わりません。そこで私は、大変な坂でも少しは大変さを軽減できるように、何かできることはないか考えてみました。例えば、電動エスカレーターをつけたり、坂の上までではなくても坂の途中まで乗せてくれる地域の乗り物などがあつたらいいと思います。また、地域の人が協力して、高齢の方や小さい子の荷物を運んであげたりするサービスの仕組みを作ることなどもできると思います。タクシーの配車アプリのような地域の助け合いアプリを開発することもいいと思います。

しかし、どれも私一人では実現することは難しい解決策です。でも、以前税金について学んだ時に税金は、消防署や警察署、学校などの生活に関わることに使われていることが分かりました。生活に関わることに税金を使っているのなら、私の考えた、地域の人困りごとの解決策を税金を使って、時間がかかっても実行することは不可能ではないと思います。

でもそれは、誰かが提案しなければできないことです。わたしはよく「自分じゃなくても他の人がやってくれるからいいや」と思ってしまうことがあります。でも、それは相手がいなければ思っていることは実行されません。なので、難しくできそうにないけれど、街のためになにかできることはしたいなと思います。

私はこれからも誰にとってもこの街が暮らしやすい街であり、さらに発展していつてほしいと思っています。そのためにも今自分にできることをやって、これからのまちづくりにつなげていきたいです。「他の人がやってくれる」ではなく自分から。

〈講評〉

高台に家があることよきや大変さ、よりよい街にするための解決策について考えを述べています。高台に住む人のために電動エスカレーターをつけるなどの解決策もあるが、筆者だけでは叶えることは難しい。そこで、街の税金の使い方に着目し、街の課題は街全体で考えていかなければならないと感じます。つい「誰かがやってくれるだろう。」と思ってしまうけど、自分から行動することが大切ですね。

☆☆☆ 銅賞 ☆☆☆

「小さな勇気が与える大きな自信」

間門小学校 六年 上関 麗太

去年、五年生の夏休みに、ぼくはけがをして、手術をしたので夏休み明けから車椅子や松葉杖を使って生活しなくてはなりませんでした。最初は「新しい道具を使うのも楽しいかも!」と思っていました。実際にはたくさんのお不便さや大変さがありました。

その中で、友達や家族や様々な人の優しさや思いやりの大切さを実感し、障害やハンディキャップを持つ人の住みよい社会について必要なことを考えさせられました。

まず、車椅子や松葉杖を使って生活してみて、どれだけの不便なことが多いかを知りました。家の中や学校の中の段差や階段、通路や普段、何気なく使っている道の狭い道路などはとても困難でした。車椅子が通れなかったり、松葉杖を使って歩こうとしても、上手にバランスを取ることが大変だったりしました。普段は気にしなかったけれど、こうしたことがどれほど大変なのかを実感しました。その一方で、友達や家族など人々の優しさにとっても感謝しました。友達は、ぼくが学校に行けない時は、お便りを持ってきてくれたり、心配して「大丈夫?」と声をかけてくれました。先生や地域の人々もぼくが越えられない段差などをお手伝いしてくれました。家族もぼくが生活をしやすいようにサポートしてくれました。そんなみんなのおかげで、もどかしさや孤独感が和らぎ、ぼくにとって大きな力と自信になって、自分でも前向きな気持ちを持てるようになりました。

この経験を通じて、たくさんのお優しさや、思いやり、手を差し伸べてもらえることで、どれほどの勇気をもらえて、前向きな気持ちになれるのかという事を知りました。街や生活環境には、今まで見えなかった不便がたくさんあります。階段や狭い道、小さな段差だって、時には心が折れそうになって諦めてしまうことだってあるのです。そんな時、仲間や周りの人の小さな勇気の声がけや手を差し伸べるのがハンディキャップを持つ人の大きな自信となるのです。そして、それはみんなが安心して暮らせる社会の一つだと思いました。

ぼくがけがをしていた足も治り、今までのように歩いたり、走ったりできるようになりました。ただ今までと変わった事があります。街で見かける車椅子の人や杖をついたおじいちゃんやおばあちゃんに、積極的に声をかけて、お手伝いしてあげるようになりました。ぼく自身が、みんなに助けられたように、今度は手を差し伸べてあげるようになりたいなと思いました。公共の場所は急には変えられないけど、社会のみんなの意識こそが、もつと住みよい社会となり、よりよい環境となるのだと思います。みんなで助け合い、理解し合うことで、意識も変わり、みんなが安心して前向きな気持ちになれる、よりよい社会になるのだとぼくは思います。

〈講評〉

実際に筆者が車いすや松葉杖を使ってみることで不便さや、人の思いやりについて考えられています。何気なく使っている階段や狭い道がハンディキャップのある人にとって大変かという事は、実際にそうだった立場になってみないと分からないことだと思います。普段の生活の意識を変えるだけでハンディキャップのある人も明るく住みよい街に感じていけるように街全体で支え合っていきたいですね。

中学生部門

☆☆☆ 金賞（中区明るい選挙推進協議会会長賞）☆☆☆

「1票の重要性」

大鳥中学校 二年 谷内 心優

先日、誕生日をむかえ14歳になりました。選挙権が与えられる18歳まであと4年。まだ国政の選挙に参加することはできません。しかし、選挙を体験する機会があります。それは中学校で行われる生徒会選挙です。普段選挙のことについて触れることがない私たちにとっては選挙のことを考える絶好の機会であると思います。私は生徒会長になりたいと考えているので、投票するだけではなく立候補者としても選挙の経験ができると思います。私が生徒会長になるためにはより多くの生徒を納得させるだけの公約を掲げなければなりません。今の学校の問題点は何なのか、どうしたらもっとより良い学校生活を送ることができるか、について真剣に考えます。逆に投票する側の立場では、立候補者の真剣な思いについてよく考えて投票すべきです。自分の1票が学校の将来を変えるかもしれないという意識を持って投票することも大事だと思います。

国政の選挙についても同じことが言えるのではないのでしょうか。日本、神奈川県、横浜市中区、をより良くしたい、という候補者の方の熱い思いに投票というかたちで答える必要があると私は思います。にもかかわらず近年投票率の低下が問題になっていきます。特に若者の低さが顕著になっており、このまま若者が選挙に無関心の状態が続いてしまうと、投票率の比較的高い世代のための社会になります。私の父や母も年金や医療介護のことを心配しています。ところが、若い世代は少子化対策、教育にお金をつかってほしい、と考えている人が多いと聞いたことがあります。考えているだけでは世の中は変わりません。投票という行動に移さなければ意味がないのです。

そこで、投票率を上げるために必要なことは学生時代から選挙に関心を持つってもらう機会を増やすことだと思います。生徒会選挙も良い機会であると思いますが、ただ役員を決めるだけではそれほど効果はないです。たとえば、生徒会選挙の時期に日本の選挙の現状について考える授業を行うなど、自分の1票が将来の日本を変える、という意識を若者が持てるの良いのではないのでしょうか。あるいは、このまま投票率が低い状態が続くのであれば、ある程度投票を義務化することも方法の1つかもしれません。さらには現在、多くの外国人の方が日本に住んでいるので一定の年数以上日本で暮らしている外国人の方に選挙権を与える、ということも考える必要があるかもしれません。

私は18歳になったら積極的に投票をしていこう、と思いますし、まわりの人にも投票することの大切さを伝えていきたいと思っています。なぜなら、これからの日本を良くしていくのは私たち一人一人の思いと行動、だと思っております。

〈講評〉

中学生部門は例年通り「選挙について考える」というテーマでしたが、作文を書いた夏休み期間中は、予定されている中区での選挙は無かったことから、より選挙を身近に感じにくい状況にあったかと思われる。

このような状況の中で、本作品は生徒会の選挙で感じた投票をする側と候補者の思いを実際に行われる選挙に重ね合わせて、投票という形で行動を起こすことの重要性をわかりやすく説明をしています。

また、投票率を上げるための具体的な三つの提言を自分の素直な気持ちで述べており、筆者の選挙への熱い思いが伝わる作品で多くの審査委員から高評価を得ました。

☆☆☆ 銀賞 ☆☆☆

「十八歳に向けて」

港中学校 三年 成田 彩夏

十八歳まであと四年。四年後、私は投票に行っているだろうか。最初は嬉しさと物珍しさで行くだろうが、その後はどうだろう。この作文では、選挙に向けて今、自分に何が出来るのかを考えてみたいと思う。

投票率が低いと言われている選挙だが、選挙年齢が二十歳から十八歳に引き下げられたのは数年前の話だ。引き下げられた理由としては、若い世代への政治参加を促し、若者の意見を取り込みたいというものだった。しかし、若者のみんなが選挙に行っているかと言えばそうではない。

何故若い世代の投票率が伸びないのか、同じ若者として何となく分かる気がする。四年後の自分は、選挙をどこか他人事のように感じているかもしれない。知識も関心もない自分が投票に行っても、その一票に意味があるのか分からないし、世の中が変わると思えない。若者の多くはこんな風に感じているのではないかと思う。

そんな他人事のように感じる選挙がある一方で、私にはとても身近に感じる選挙がある。中学校の生徒会役員を決める生徒会総選挙だ。私はこの選挙への参加は全く苦にならず、むしろ楽しんでる。何故なら、自分の学校生活がかかっているからだ。靴下の色を自由にする、多学年との交流を増やす、自習室や自動販売機の設置等、より良い学校生活になる為の公約を聞くのが楽しいし、立候補者の演説を真剣に聞く自分がいる。

しかし、これを政治の選挙に当てはめてみると、全くこうは思えない。私は政治や社会情勢の知識が乏しく、政治的な主張もないし、何を変えたいと具体的な考えもない。どの政党が自分に近いのかも分からないし、立候補者も知らない人ばかり。このようなマイナスのことばかりで、選挙に行こうと思えないだろう。だから、逆にこれらを克服すれば自分の一票を大切にしていけるのではないかと思う。

その為には、まず知ることから始めたい。政治、社会情勢、医療や福祉、税金等。学校の授業でこれらをもっと多く扱ってもらえると嬉しい。小学校の頃から世の中を知る授業をもっと受けたかったと思う。授業以外にもネットやTVからの情報の取得が有効だと思う。

先日面白いアプリを見つけた。十四の質問に答えるだけで自分の意見に最も近い政党をマッチングしてくれるものだ。たった十四個の質問に答えるだけなのだが、政治への着眼点が少し分かった気がして、選挙を身近に感じる事が出来た。

今まで食わず嫌いとなっていた政治や社会のことを見つけるとっかかりとなるものに出逢えた気がしたため、今後このように積極的に情報の取得に励みたい。

これが続けていけば、四年後の自分は選挙を身近なものに感じて、自分の意思で投票出来ると思う。

〈講評〉

政治に対して興味関心が薄く、どこか他人事のように感じている若者がいるのではないかと主張に対して、自分の学校生活に関わる選挙に関しては興味を持てることから、選挙も知ることから始めていきたいことを読み手に分かりやすく、まとめられています。「政治や税金の授業などもっと多く扱って欲しい」という考えはこのさきの若者の投票率を上げることにつながっていくと思います。具体的なアプリなどの紹介もし、より政治に興味を持つことができる作品だと感じました。

☆☆ 銀賞 ☆☆☆

「考えて票を投じる」

仲尾台中学校 一年 浜田 湊

僕の身近なところにも選挙があります。選挙はとても大事なことだと思います。大事な決め事などするときにはきちんと考える事が大事です。

僕が人生初めて経験した選挙は、小学生の時の代表委員会選挙です。自分は、人の前に出て話すことがとても苦手でした。サッカーでも大切な話し合いをする時に、なかなか自分の意見が言えませんでした。試合中も声を出すことが苦手で、味方との連携が上手にいかず、ミスが多くなってしまうことがあります。そこで人前でたくさん話す機会がある、代表委員会に入りたいと思い、立候補しました。

立候補したのは、僕以外にも三人ほどもいました。四人の中から選ばれるのは一人だけです。そこで、なぜ代表委員会に入りたいのか、入ったらなにを頑張りたいかを、クラスのみんなの前で伝えて、一人を選ぶ代表委員会の選挙が行われました。

僕の番が来た時には、みんなに僕の気持ち伝わるように、みんなの方を向いて大きな声でハキハキと話すことを意識しました。内容では、消極的な自分を変えるために人前に立つ機会が多い代表委員に入って、自信を付けたいという思いを伝えました。また、よりよい学校を作ってみんなを笑顔にしたいと言う熱い気持ちを伝えました。

結果、四人の中から見事選ばれました。その時僕はとても嬉しかったです。他の三人の分まで頑張ると責任が沸きました。

選挙では、誰が誰に投票したか分からないようになっていきます。しかし選挙後に、仲の良い友達に

「みなとは、友達だから一票入れたよ。」

と、言われました。僕はこれに対して悲しかったし、内容をきちんと聞いて考えてくれたのかなと思いました。僕が投票する時には、仲が良いからなどの理由で決めるのではなく、何を頑張りたいのか、この人に任せて良いのかなどを、きちんと聞いて一票入れていきたいと思いました。また普段の生活面も見て決めたいと思いました。

平成二十八年に選挙権年齢が満十八歳以上に引き下げられました。僕が選挙権を持つのは後五年です。僕が選挙権を持ったら、必ず選挙に行きます。その時には、立候補者の話をよく理解して、どの人に任せられるのかを考えて投票しようと思います。

〈講評〉

小学校の代表委員会に立候補した際に、友達から「友達だから一票を入れたよ」と告げられた経験から、一票をどのようにして決めるかを自分の言葉でまとめることができている。実際に立候補者として演説をし、熱い気持ちを伝えたのにそれが伝わらなかった悲しみは、票を入れる前に考えるきっかけになったのだと思います。だからこそ立候補者の話をよく聞き、理解して一票を入れることが大切なのだということが伝わってくる作品でした。

☆☆ 銅賞 ☆☆☆

「選挙権をもたない私たちにできること」

港中学校 三年 浅野 陽音

私は十五歳の中学三年生だ。大人とも子供とも言えないような微妙な年齢だが、最近まだ子供だと思わされる出来事があった。東京都知事選挙だ。当然私は横浜市民なので投票できないが、もし私が住んでいる地域で選挙が行われても、私はまだ投票できないことを考えると無力さを痛感した。そのため、私は「選挙権を持たない学生にできること」は何か、考えてみることにした。

選挙について調べたときにまず驚いたのは投票率の低さだ。横浜市のデータによると、中区の投票率は市内で三番目に低い四十・四四パーセントだった。さらに驚いたのは、投票率一位の栄区でも四五パーセントで、五十パーセントを切っているということだ。このことから、市内の選挙権を持つ人の半数以上が投票していないことが分かる。また、年齢別投票率を見ると、投票率が一番低いのは二十代だった。どの資料を見ても若者と呼ばれる年代の投票率が圧倒的に低かった。

ではなぜ若者は選挙に行かないのか。その理由として、「高齢者向けの政策が目立つから」というものが挙げられていた。実際、投票率の過半数を占めているのは高齢者の割合だ。そのため、政治家にとつて選挙の鍵となるのは高齢者の票なのだ。政策が高齢者向けになるのは自然なことである。そんな現状を変えるために私たちにできることは、身近な人を通して全体の意識を変化させることだと考える。例えば、成人している知り合いの人に選挙に行くよう促すなど、兄弟・親戚・近所の人といった身近な成年者の選挙に対する意識を変えることができれば、そこから広範囲に変化をもたらすことができると思った。私には十八歳の兄がいるので、友人などに選挙に行くよう呼びかけてもらおうと考えている。若者の投票率があがっていけば、政策が若者に向けたものになったり、意見を取り入れてもらえる機会が増えたりするはずだ。

このように、選挙権を持たない私たちにも直接的ではないが、影響を与えられるということができるのだ。投票できる年齢になるのを待つのではなく、「今」からできることを探して行っていくことが大事だと考えた。たとえば大きなことができなくても、みんなに注目されるようなことができなくても、私たちが考え、実行していけばいくほど私たちの未来はよくなっていくのだ。

〈講評〉

若者が選挙に行かない理由の一つとして、高齢者向けの政策になってしまっていることにあることを挙げ、その現状を変えるために互いに声を掛け合う必要性をわかりやすくまとめられています。選挙権を持たない中学生が、できることとして「身近な人の意識を変えること」は、どの中学生にもすぐ実践できることだと思います。「今」から少しずつ周りの人々に影響を与えていくことで、未来がよくなることが伝わる作品でした。

☆☆☆ 銅賞 ☆☆☆

「これからの未来のため」

港中学校 三年 三角 真優

私は、中区の選挙投票率を見てとてもびっくりした。十八歳以上の人は、ほとんどが投票をしていると思ったからだ。私は、どうしたら投票率が上がるのか考えてみることにした。

まず、私は選挙について調べてみた。選挙とは、「国民の意見が政治に反映されるために重要な取り組みである。」つまり、これからの政治を任せる人を決めるということでも重要なことであると分かった。普段、あまり政治に関わることが出来ない私たちにとっても、重要な機会である。だからこそ、投票率を上げていく必要があると思う。

では、実際どのような取り組みをすれば良いのか。投票率が高い世界の国の選挙を見てみよう。ベトナムでは、代理投票が慣行。シンガポールなどでは、投票しないと罰金が課せられるということもあるそうだ。国内でも色々な取り組みが行われている。例えば、選挙割。選挙期間中に、対象店舗で投票したと伝えると、割引などのサービスが受けられるものだ。他にも、インターネット投票を取り入れる自治体もあるようだ。投票率が低いままだと、市だけでなく日本全体の活力が低下してしまう恐れもある。私は、このような取り組みを試してみても良いのではないかと思う。

そして、投票率を年齢別に見たとき、他の年代に比べ、若い世代の投票率が低いことが分かる。若者がもっと積極的に選挙に参加することで、幅広い年代の考えを政治に取り入れることができると思う。そのために私は、選挙に出る議員の方針や、プロフィールなどをSNSでアピールすることが大切だと考える。私は、今までどんな意見の人が選挙に出ているのかも知らなかった。顔や名前だけでなく、どういったことを目標として選挙に出ているのかも発信すれば、覚えてもらいやすくなると思ったからだ。また、若者の選挙に対する関心も高まるのではないか。私が、実際に選挙に行く立場になって、そういった発信をしている人が居れば、投票に行ってみようかなという気持ちになる。私は、選挙の方法は、時代や投票する人に合わせて少しずつ変わってほしいと思った。若い人が、選挙に関心がないことや、行くのが面倒などと言っている人の気持ちも分かる。なので、より幅広い世代に投票してもらおう取り組みが大切だと思う。

私が、十八歳になったら、積極的に投票に行きたいと思う。そして、将来の暮らしや政治に少しでも自分の意見が反映されるといいなと感じた。

〈講評〉

若者の投票の率の低さが問題になっていることから、どのような取組をするべきかを他の国の選挙方法やインターネット投票、SNSを活用した方法を提示していて、よくまとめられています。「時代や投票する人に合わせて少しずつ変わって欲しい」という言葉は若者の投票率を上げるキーワードになると思います。若者だけでなく、どの世代も投票しやすい方法を考えなければならぬと思わせる作品でした。

☆☆ 銅賞 ☆☆☆

「選挙権を得て投票するまでに大切なこと」

仲尾台中学校 三年 速水 玲愛

私が最初に経験した選挙は、中学生になってから生徒会の役員の選挙だった。

小学生の時の学級委員決めと明らかに違っていたのは、立候補者それぞれに主張や公約があることだ。私は選挙に参加したが投票する際の心境は、小学生の頃の係決めと何も変わらなかった。つまり選挙に参加したという実感のようなものは、ほとんどなかった。なぜならば、この選挙で投票した自分の票が、中学生生活の何かに変化をもたらすものになるとは思えなかったからだ。今ある中学校生活の与えられた環境に満足しているし、これ以上何か新しいルールを作りたいと思っていなかった。仮に不満があったとしても、自分の票がそれを変えるものになるとは思えなかったからだ。そう思っていたので生徒会員がどのような役割を果たしているのかを知らなかった。知らないから、公約がその後どうなったのかも関心がなく、前任の役員が退くので選挙があり、自分はそれに投票する。この流れに何の疑問なかった。知らずに任せてなんとなく選ぶという状態だった。今考えるとそれは、中学校生活を送る自分に対して無責任な行動だと思う。なぜそう考えるようになったかという点、税金について考えたことがきっかけだった。

税金について何か意見を持つとした時には、まず、税金について知ること、次に税金がどのように使われているのかを知ること、そしてその使われ方が正しいのかを考えることが必要だった。選挙についても同じことが言えると思う。わたしたちが数年後、選挙権を得た時、選挙運動が始まった時から投票までの間だけ、立候補者に目を向けるのでは、今と全く変わらない。選挙権のない「今」から日常生活と行政を結びつけて考える、「視点」を持つことが大切だと思う。

自分の住んでいる地域の行政に興味を持ち、公報やSNSなどを通してその活動を知ること。そしてその活動が正しいものか、私たちにとって有効なものかを考えておくこと、そして、よりよい「まち」にするためにどのような人を選べばいいかを考えておくことが、選挙権を得て投票する時までに今のわたしたちにできる大切なことだと私は思う。

〈講評〉

なんとなく選挙に行き、投票をしている若者は少なからずいるのではないでしょうか。中学校の生徒会役員選挙でなんの関心もなく投票をしていた自分に対して、税金について考えたことをきっかけに、今までの自分の無責任な行動だったことに気付いたという実体験を、具体的にまとめられています。「日常生活と行政を結び付けて考える、視点をもつ」ことは選挙権をもったときによりよい「まち」につながる大切な意識だということ伝えてくれる作品でした。

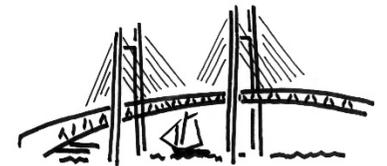
審査をふりかえって

小学校A部門では「わたしのまちのすきなところ」というテーマで作文に取り組みました。中区の歴史や人の温かさにふれた文章が多くあり、このまちの素敵なおところを再確認させてくれました。作文を書いた多くの人にもまた、改めて中区の素晴らしいところを感じることができたのではないのでしょうか。これからも自慢できるまち「中区」を世界に広めていってほしいと思います。

小学生B部門では「より良いまちをつくるために」をテーマに作文に取り組みました。入賞をされた作品には人のやさしさについて書かれたもの、町の良さに気づこうとする意識について書かれたもの、ごみの排出を減らしていくことについて書かれたものがありました。どれも大切なもので、「まち」は人が創り上げていくものです。その「まち」に生きる人が優しい人であふれていれば過ごしやすくなりますし、きれいな地域であれば人は集まってくると思います。また、そのような素敵な「まち」に暮らしていることに気づくこともとても大切なこと。当たりまえだけど、なかなかできていないことに目を向けることができた作品が多くありました。

中学生部門では「選挙について考える」をテーマに作文に取り組みました。中学生の皆さんはまだ選挙権を持っていません。しかしだからこそ、今何ができるのか、自分が18歳になったとき何をしなければならないのかについて深く考察された内容が多くありました。これまでの学校生活の中で体験した生徒会本部役員選挙等を例に1票の重要性について書かれたもの、若い年齢層の投票率の低さについて書かれたものなどがありました。どの文章からも「自分が選挙権を持ったら、さらにより良い取り組みをしたい」という頼もしい意志が感じられました。

どの部門でも自分が実際に体験したり、感じたりしたことを、自分にしか書けない文章で表現してくれました。これからも自分たちがすむ「まち」の良さを感じ、誇れる「中区」であり続けられるような取り組みができることを期待しています。



■作品の選考・講評■

※役職名は執筆当時のものです。

横浜市立本牧小学校主幹教諭

栗原 珠紀

横浜市立大鳥小学校教諭

高橋 つぐ美

横浜市立横浜吉田中学校教諭

水上 敦絵

横浜市立横浜吉田中学校教諭

石川 紘靖

横浜市中区明るい選挙推進協議会会長

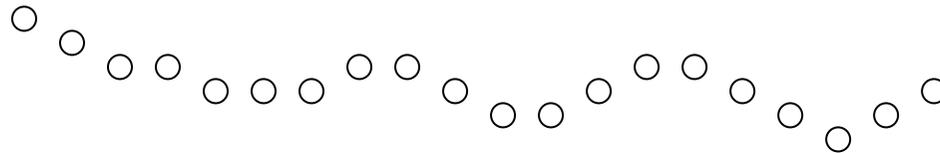
嘉代 哲也

横浜市中区選挙管理委員会委員長

佐久間 衛

横浜市中区長

小林 英二



第44回

中区明るい選挙推進作文コンクール入賞作品集

令和7年2月発行

発行

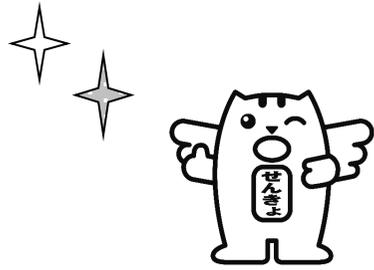
中区明るい選挙推進協議会／中区選挙管理委員会／中区役所

〒231-0021

横浜市中区日本大通35番地

TEL 045-224-8118

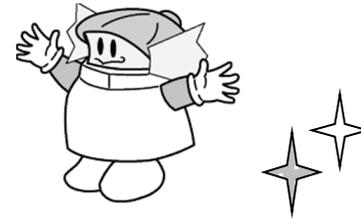
FAX 045-224-8109



あか せんきょ
明るい選挙キャラクター
せんきょ
選挙のめいすいくん



よこはましなかく
横浜市中区のマスコット
スウィンギー



よこはましせんきょ
横浜市選挙のマスコット
イコットJr.